

ラテン語とフランス語

古典作品を素材に [20]

キケロ『老境論』より — 自動詞の非人称的受動構文 —

秋山 学

今月はキケロ『老境論』からテキストを選ぶことにしましょう。

原文 At multī ita sunt imbēcillī senēs ut nūllum offici aut omnīnō vitae mūnus exsequi possint. — At id quidem nōn proprium senectūtis vitium est, sed commūne valētūdinis. Quam fuit imbēcillus P. Āfricānī filiū, is quī tē adoptāvit! quam tenui aut nūlla potius valētūdine! Quod nī ita fuisset, alterum illud exstisset lūmen civitātis: ad paternam enim magnitūdinem animi doctrīna ūberior accēsserat. Quid mirum igitur in senibus si infirmi sint aliquandō, cum id nē adulescentēs quidem effugere possint? **Resistendum**, Laeli et Scīpiō, senectūti est, eiusque vitia diligentiā **compensanda** sunt, **pugnandum**, tamquam contrā morbum, sic contrā senectūtem, **habenda** ratiō valētūdinis, **ūtundum** exercitātiōnibus modicis, tantum cibi et pōtiōnis **adhibendum** ut reficiantur vīrēs, nōn opprimantur. — *De senectute*, XI 35-36.

仏訳 Mais, dira-t-on, beaucoup de vieillards sont si faibles qu'ils ne peuvent exercer aucune des charges que comporte une fonction ou même la vie. — Mais, loin d'être propre à la vieillesse, ce défaut est inhérent à la santé. Quelle faiblesse chez le fils de P. Africanus, ton père adoptif! quelle santé frêle ou plutôt nulle! Autrement, il se serait révélé le deuxième flambeau de la cité, car, à la grandeur, d'âme paternelle, il avait ajouté une culture plus riche. Pourquoi donc s'étonner que les vieillards soient parfois débilés, alors que les adolescents eux-mêmes ne peuvent échapper à ce mal? Il faut, Lélius et Scipion, résister à la vieillesse et racheter ses inconvénients à force de soins, lutter contre la vieillesse comme contre la maladie, tenir compte de la santé, pratiquer des exercices modérés, prendre juste assez de nourriture et de boisson pour refaire ses forces, sans les écraser.

訳 しかしながら、務めを果たすことも、生活上の義務を遂行することも全くできないほど

に虚弱な老人の数は多い。とは言うものの、これは老齢に固有の悪というわけではなく、むしろ健康の面で共通する悪なのだ。プブリウス・アフリカヌス【＝大スキピオ】の息子、つまり君【(小)スキピオ; スキピオ・アエミリアヌス】を養子にした人物は、何と虚弱であったことか。彼はほんのわずかな健康の持ち主だった。否むしろ、まったくと言ってよいほど健康を持ち合わせていなかった。もしそうでなかったなら、彼は国家にとって第二の光となっていたことであろう。というのも、彼には父譲りの精神の偉大さに加えて、父に優る学識が備わっていたからだ。したがって老人のうちに、時に虚弱な人物がいたとしても、何の驚くことがあろうか。なぜなら、虚弱さとは若者ですら逃れることのできないことなのだから。ラエリウスとスキピオよ、老齢には抗せねばならない。そして老齢の悪は、精勵によって相殺されねばならない。あたかも病魔と闘うかのごとく、老齢に対しては闘わねばならない。健康に関する配慮を持たねばならず、節度ある鍛錬を実践せねばならない。食物や飲料は、体力が回復する程度に摂取すべきであって、体力が減じるほどであってはならないのだ。

『老境論』は、大カトー（前237-149）が小スキピオ（前185-129）とラエリウス（前190-129）に語りかけるという設定の作品です。この小スキピオの養父（プブリウス・コルネリウス・スキピオ）は、大スキピオ（前236-185）の長男でしたが、前180年に鳥占官（augur）になったことが知られるのみで、確かに虚弱だったようです。

例文の後半に注目しましょう。ここには **resistendum**, **compensanda**, **pugnandum**, **habenda**, **ūtundum**, **adhibendum** というふうに、動形容詞（未来受動分詞）形が6つ連続して現れています。各々不定詞は **resistere**（抗する）、**compensāre**（相殺する）、**pugnāre**（闘う）、**habēre**（持つ）、**ūtī**（用いる）、**adhibēre**（適用する）ですが、このうち直接目的語＝対格を支配する他動詞は **compensāre**, **habēre**, **adhibēre** のみで、それ以外の動詞すなわち **resistere**, **pugnāre**, **ūtī**（形式受動態動詞）の3つは、対格以外の格を要求します（**resistere** は与格、**ūtī** は奪格を支配；**pugnāre** は与格支配が多いが本文のように単独での使用その他もあり）。英語や仏語では、他動詞とは直接目的語を支配する動詞と規定されますが、格変化をもつラテン語では、他動詞とは「対格を支配する動詞」を指し、対格以外の格を支配する動詞は「自動詞」に分類されます。

一般的に、能動態の文を受動態に変換した場合、受動文では、能動文の対格目的語が主語になりますが、これは他動詞に関して言えることです。自動詞に関しては意味上、受動態の構文はあり得ないはずですが、非人称文の形式においてのみ受動態に換えることができます。その際、本文のように“**resistendum est senectūti**”（与格）、あるいは“**ūtundum (est) exercitātiōnibus modicis**”（奪格）のように、自動詞として要求する斜格形の語彙は、その格形のまま残されることになります。

（あきやま・まなぶ）